

特集 「野生の世界」の舞台裏 ケニア国立公園 50 年の歴史



元国立公園協会局長 P.オリンド回顧録より

『ケニア国立公園 50 年の歴史 元国立公園協会局長 P.オリンド回顧録』 小原由美子 中村千秋 共著
澤口範子 翻訳 より抜粋/OMC カード「アフリカ象を守る」2007 年度助成事業

アフリカの「野生の世界」を残すため、尽力した人々がいる。かつてケニア国立公園協会局長として「世界で最良の国立公園システム」構築をめざした、P.オリンド博士もその一人だ。彼の回顧録に記されたケニア国立公園の創設と運営の歴史から、エピソードの一部を紹介する。そこからは、アフリカの「野生の世界」もまた、人の暮らしとの軋轢（あつれき）の中にあることがわかる。

1 ナクル湖国立公園 公園用地購入と境界柵

(1) 土地購入への支援

ナクル湖の北部一角が国立公園として告示されたのは 1961 年。南部については、野鳥ハンティングの管理・規制を目的にゲーム（狩猟管理）局の管轄下におかれ、公園指定は放置された。

ナクル湖全体が保護政策下に置かれたのは、オリンドがケニア国立公園協会局長に就任した 1966 年であった。北部・南東部・南西部の土地は、WWF の支援で取得し、1967 年に現在の公園面積となる。ライオンヒルズを含む“Nderit 農園”の土地から“Hopcraft 農園”所有の北部湖畔まで 676 km²（約 167,000 エーカー）あった。両地主はケニア市民権をもつ英国人で、国立公園化のための土地売却に厚意的だった。

湖北部の Hopcraft の土地 0.8 km²（200 エーカー）の売却価格は約 50 万シル（ケニアシリング）で当時としてはかなりの高額だった。ケニア国立公園協会は「積立金」や寄付金を充当することで合意した。公園面積拡大が計画されてからは、公園域周辺の市街化は止み、その地域の環境破壊などはなくなった。

Nderit の地所にはライオンヒルズも含まれ、360 km²以上あり、600 万シルもの価格だった。しかしオリンドが WWF インターナショナルから助成を取り付けて成功を収めた。オリンドは、水鳥に関する国際的権威でナクル湖の重要性を知る故ピーター・スコット伯爵に個人的な伝手を経由して支援を得、その縁故でオランダのバーナード王子に事情をアピールした。WWF へは、オリンド自身が公式に申請したわけではなかったが、王子に宛てた私信が功を奏した。

1968 年、ケニア国立公園協会と WWF の間に合意書が交わされる。土地購入費用としての小切手保証書を供与するためケニアへの招待を受けた王子は、エジンバラ公も招待した。

(2)湖西部は不動産会社と土地交換

湖の西側には売りに出された広大な土地があったが、土地所有者は国立公園にすることを強く反対していた。所有者は南アフリカ人で、土地バイヤーらで組織される土地購入協同不動産会社に土地を売却してしまった。オリンドが危惧したことは、湖周辺が小区画の土地で生計を営む農民らがいる中で、土地がさらに細かく分割されてしまえば、国立公園としては、密猟や閉鎖系の湖の環境汚染という問題が発生する。オリンドは評議会議長に議会招集を要請し、評議会にそうした問題を説明した。

また、不動産会社幹部との折衝についての許可を求めた。Nderit の土地と湖に近い西岸の土地を交換すれば、公園としては、アカシア林のある西部湖畔の土地を取得できる。評議員とオリンドは、諸問題を実地で理解しようとナクルへ行った。事態を見た評議員はオリンドに交渉に入ることを承認した。交渉は、1966年—67年半ばまで約15カ月間続いた。土地の価値の見直しを求めため長期間を要し、結局不動産会社と国立公園は、不動産会社が提供する土地1エーカーあたり、公園所有の土地2エーカーを提供することで合意した。これで湖に近い公園西部の境界線付近に定住域が迫ることを回避することができた。

(3)フェンス(境界柵)の設置

当時、ナクル湖国立公園には境界柵は設置されておらず、野生動物は西側のマウ森林地帯への往来が可能だった。一方で犬を連れたハンターが、食用肉や販売目的で侵入していた。公園はナクル市街への入口に位置していた。移動する野生動物としては、ゼブラ、バッファロー、キリンなどがある。こうした不安定な状態は、不動産会社らとその土地をうろつく間ずっと続いた。

1969年、株主(加盟社)の大半が個々の区画配分を要請し、配分された。土地の細分化は公園の質に大きなインパクトだった。各区画は5エーカー以下で、新たに土地オーナーとなった人々が、立て札を立て、公園西部にはそこらじゅうに集落ができてしまったのである。ただ幸いにも、小区画(私有地)と公園境界の間にはアカシア林の成長がみられ、そのお陰で観光者らに対して目隠しとなっていた。

公園協会は薪拾いや水汲みなどの侵入者を防ぎ、また農作物と野生生物の利害衝突を避けようと公園にフェンスを設ける計画を立てた。1969年、西側境界に沿って部分的にフェンスが立てられると周辺住民から苦情が出るようになった。これについては、市民環境教育プログラムの樹立に助けられ、地域住民への教育が進められた。長期的受益への理解、それぞれの土地での植林などを学び、人々は自身の土地に成長の早い樹種(Gravilla や根の浅い樹種、薪や建材などになる灌木など)を植え始めた。中にはオーストラリア原産のユーカリの植林もみられた。教育プログラムには食用植物の栽培も指導した。人々が教育プログラムを受け入れたことで衝突は大幅に減少した。

公園東側の境界は、居住域と公園域を区別するためライオンヒルズまでをフェンスで囲った。これにより1969年から人間と野生生物の対立も減少した。

ナクル湖国立公園の拡大は、自然な変遷を維持する上でオリンドの野生生物保全活動の中でも主たる貢献作業となった。面積拡大で公園内の生息地が増えたことで、観光客へのPR効果も向上した。動植物の共生や多様性向上にも役立った。やがて公園は、ケニアの中でも最も観光客の

多い公園へと成長するのである。

2. メルー国立公園 地方議会への配慮

メルー動物保護区は、メルー地方議会の下では良好な管理はなされていなかった。道路整備や密猟防止対策は資金不足だった。ただ、エルザ基金から一部の支援を受けていた。地方議会議長はメルー動物保護区を国立公園化して、ケニア国立公園協会に移譲することを打診してきた。交渉は1965年からオリンドが局長に就任する1966年まで続いた。

オリンドはメルーの書記官と会談した。そして保護区を「国立公園候補地」として格上げし、その交渉進行についてはオリンドに責任をおき、資金負担を引き継ぎ、公園にふさわしい改善を実施することとなった。こうした提案と引き換えに、メルー地方議会書記官は、議会での雇用者をそのまま雇用し、給与は公園協会が引き受けてくれるよう希望した。オリンドは議会側の負の遺産について公園協会議長に報告した。

協議は長引いたが、公園協会側は、議会がBanda（レオパードロックにあるロッジ）からの受益や、その部分の土地に今後ロッジなどを設置する場合も、その受益については議会が保持することで合意した。

議会側は保護区を国立公園協会に移譲することで同意した。オリンドは担当省を通じて、メルー議会議長を国立公園協会評議員に指名すべきと進言した。評議員は全15名という規約のため1名のみをメルーから選んだ。こうした配慮が議員らを納得させた。

協会は、動物保護区のスタッフ全員を引き請け、国立公園並みの報酬を保証した。オリンドは、議会の決断に感謝を込め、メルー地方からさらに数名の人員を雇用することにした。メルー議会の権限職位者らの誤解を招かぬよう配慮を欠かさないよう努めつつ、保護を目的に国立公園面積は大幅に広がった。

こうした一連の合意は、組織の将来性に寄与するとともに国内でも注目を集め、野生動物保護区を国立公園に移譲してはどうかと考える地方議会も多くなった。

しかし国立公園になった後も、政府に土地を引き渡したのに何の恩恵も受けていない、とメルー族コミュニティより度重なる抵抗があった。これは国立公園化を阻みたい地方議員らの煽動であると見受けられた。

オリンドは、ウォーデン（各国立公園の責任者）として2年間勤務していたMr. Tedd Gossをツァボ国立公園に異動した。彼はメルー族出身だった。彼は職位を駆け上り、環境教育部門の副局長となった。オリンドは彼を野生生物教育部門のウォーデンとして、メルー国立公園のヘッドクォーターに異動することを推奨した。

1968年、オリンドはメルー国立公園のメインゲートに環境教育センターの設立を決意した。目的は近隣コミュニティに向けての情報伝達・説明業務であった。メルー国立公園には地域の人材を多数雇用し、公園協会との関係維持を配慮した。その結果、事態は好転し、地元からの観光者も増加した。

3. アンボセリ国立公園 マサイ コミュニティとの交渉

(1) 公園拡張の大統領命

アンボセリ国立公園の創設には多くの労苦があった。アンボセリは国立公園協会により 1958 年に保護区として指定され、その後、ケニア独立により、その管理が地方議員 Ole Kejuado 氏に移されたのだが、氏の管理は当初から誤りだらけだった。そのため国立公園協会に管理を任せろべきだとの一般の声も上がっていた。当初、保護区面積は 1650 平方マイル以上であったが、保護区疎開地あたりに人間が定住するようになり、国立公園協会はその地域 300 平方マイルを国立公園として保護したいと要望した。しかし地域コミュニティはアンボセリに季節的に現れる湖の湖床 50 平方マイルのみを国立公園としてほしいと希望した。湖床は植生もない乾燥地で、乾季には砂ばかりとなり雨季にのみ水で覆われる。この地域は野生生物保護には重要だ。ゾウ、バッファロー、アンテロープなど、草食動物の水場・採餌場が他にはない。他方、地域コミュニティが一番期待していたのは、湧水管理と家畜の放牧地だった。

大統領は、国立公園が管理する野生生物保護による観光促進が有益であるという認識をもっていった。オリンドは大統領にその地域が野生動物の移動に必要で、海外観光者への PR にもなると説明した。大統領は、キクユ族であるが幼少時はマサイ族の中で育った人だ。大統領はマサイの人々の要望に応えなかっただろうが、理解を示してくれた。アンボセリの国立公園化についてのケニア国立公園の必死の努力は、常にマサイコミュニティの抵抗をうけた。最終的に今日の面積と同じ 150 平方マイルを国立公園にするという大統領命が下された。

地方議会による管理下でアンボセリを保護区のまま維持していたら、国立公園の質を危機にさらし、動植物種の消失という結果をもたらしていたらう。

(2) 公園内の放牧をめぐる対立

マサイコミュニティと国立公園協会に関する人間生活と野生動物間のトラブルは、彼らの主張である「自分たちと家畜牛の飲み水の確保」であった。彼らは国立公園の存在に抵抗し、家畜牛の採餌場としての草原を望んでいた。

東アフリカ諸国は、乾季と雨季の繰り返しがある。マサイコミュニティからオリンドに面会に来て、公園内への放牧許可を求めてきた。水場の利用が目的という。オリンドは、他でもない局長自身から「公園内への出入り許可を与えられる」という前例をつくっておきたいのだな、と察知した。オリンドは時間が欲しいと回答し、上級官会合を招集してその件を審議した。

会合参加の誰もが、その要求を却下すべきと合意した。しかしオリンドはそれでは解決にならないと考えた。もし公園側が要求を却下するしか選択肢がないのであれば、マサイの家畜牛用の水を確保する他の方法を提示しなければならない。この件をさらに吟味するため、オリンドは経理部チームと会合を開き、主任会計士に予算残額を尋ねた。他のプロジェクトではありえなかったことだった。

国立公園側には余分な予算などなかった。しかし国立公園がマサイコミュニティに対し、ボーリング（水脈探査）を打診した。公園境界外で水脈を見つけることができれば、マサイの人々も家畜も、さらには野生動物までもがその水を利用することができる。

マサイリーダーに、公園内での湧水利用は不可能だが、水源を公園外で探すための予算を探す旨を伝えたが、この内容は怒りを買うだけだった。リーダーたちの真の狙いは、採餌のための放牧であって、湧水利用は口実に過ぎなかったからだ。

オリンドの提案は、リーダーたちから即座に却下された。しかし公園協会側はボーリングを行い、ポンプを使って地表に水を汲み上げた。その場所は、公園境界から少し離れた場所にある。

こうした行為は、政治的煽動から局長の立場を守り、スタッフを守り、ケニア国立公園側の立場で本件に関わるよう国家大統領に PR できるというものである。マサイの人々は依然抵抗し、その表明として公園内の湧水を使用し続けた。

オリンドは米国へ飛び、公園を支援するため、マサイコミュニティ用の湧水汲み上げ器材・工事費・維持費の資金探しを開始した。これが彼らを納得させるだろうと思ったからだ。

数千ドルの資金を提供したのは、ニューヨーク動物学協会によるアンボセリプロジェクトファンドだった。とはいえ、供与額では、送水用鉄パイプの購入には足りず、PVC プラスティックパイプを使用することにした。湧水場の一端にポンプが設置され、文句なしの水質の水をマサイコミュニティに提供した。

マサイの人々は、公園外の美味しい水に満足はしないようだった。結局は放牧が目的、という根本は解決していない。マサイコミュニティは草と水を求めて移動する遊牧民だった。マサイが飼育するたくさんの牧牛を満たす草原は、公園外には存在しなかった。

マサイと公園間の歴史的対立は続き、大統領選前年の 2006 年など政治的駆け引きがあるたびに噴出した。大統領候補キバキ氏はマサイコミュニティから支援を取り付けたかった。しかしそうした試みも、政策サイドからは、アンボセリを国立公園として維持することに軍配が上がったようだ。

4. ナイロビ国立公園 無補償金の方針と土地問題

ナイロビ国立公園は、ケニア国内では最初の保護地区として 1946 年に指定された。公園南部にはマサイ族コミュニティに帰属するトラストランドもある。そこでは何世紀にもわたり、動物の季節移動が続いている。経済システムの悪化によりマサイの人々の流入増加で、近隣地主は民間建設業者に土地を手離し、業者は土地をフェンスで囲い、動物の移動を妨げるようになった。

オリンドが局長になった頃は、ナイロビ国立公園にはとくに深刻な問題は見られなかった。せいぜい、公園外にライオンが逃げた、家畜を襲ったなど、周辺住民の安全に関わる事件程度だった。時にライオンにより家畜牛が殺されるようになり、牛の所有者は政府に補償を求めた。しかし国立公園の規定では、ライオンだのバッファロー、ヒョウによる被害について責務を負っていなかった。そのため当時は被害に遭った損失についての支払いはされなかった。

所有者からの苦情報告で、ライオンは国立公園に戻されるのであって、ライオンやヒョウの逃亡を防止するという方策はとられなかった。家畜を失った人々は補償について不満をもち、公園側からの支払いがないことに腹を立てた。結果として、そうした人々の大半が、不動産会社に土地を売却したのである。放牧場周辺の人口が増えるにつれ、動物たちもそうした地域への侵入を遠ざけるようになり、マサイ族の家畜牛を襲うように南側へ移動していくのである。

KWS（ケニア野生生物公社）は、今日に至っても、補償は実施していない。しかしナイロビ国立公園をフェンスで囲うことに難色を示した公園支援者ら（ナイロビ国立公園を支援する会）は、野生動物による被害を補償しようと、小規模ではあるが基金を集めたのである。

マサイコミュニティは、こうした支援者らと共に、ナイロビ国立公園を包囲するフェンスの設置に反対の立場をとった。それは保護保全のためでも公園のためでもなく、マサイとしては、公園の南東部が開放されている限り家畜を放牧できるからである。

オリンドの意見は、一刻も早く公園をフェンスで区切り、これまでこの公園内で観察された動物については、現況で観察されないとしても、移動・再生のリハビリテーションを行うことであった。ただし公園内で可能な個体数維持は科学的見地に沿って実施するというものである。

人間活動の影響を避け、公園を強化することを目的に、アシ川から公園事務所、マガディロード、マガディ川に至る区域には、オリンド就任以前からフェンス設置が施されていた。動物が市街へ侵入することも防がれた。ただし公園南部への自然な移動が妨げられることはなかった。

オリンドは公園南部にもフェンスを設置し、動物を公園内に留め、密猟や食肉取引の手から守ろうとした。

オリンドとしては、マサイ族の人々が、公園延長に必要なキテンゲラ地域の一角の売却についての話し合いに応じてくれること、あるいはキテンゲラのコミュニティが、「キテンゲラ国立保護区」を謳うことで、協同保護活動を進めることを期待していた。保護区となれば、彼らも経済的な受益が保証される。

しかしこれが実現することはなく、将来的にも見込みはほとんどないようだった。マサイたちは、土地問題を巡って政府との間には苦い経験をもっていた。イギリスがマサイの土地を奪い、その後、大統領のケニヤッタもモイも、同じことを繰り返したのである。そうした経緯から、マサイは政府に否定的だ。かつ、政府側の野生生物保全団体に対しても、マサイにとっては政府と同様にとらえ、協力的な要望でさえも、マサイには政府がまた土地剥奪に来たとしか受け止められないのである。そのため、マサイに協力せよというのは大変なことなのである。

結局オリンドは、キテンゲラのマサイ族との交渉を果たせず、東アフリカ野生生物協会所属の時代に努力を続けるしかなかったのだが、これも成功には至らなかった。

5. ツァボ国立公園 ゾウの間引きと密猟

以下、ツァボ国立公園に関する記述は、「ケニアにおけるゾウ管理の歴史」（中村、1994）についてのオリンドの考察・引用に基づくものである。

(1)ゾウの間引きと「研究サンプル」密売

60年代初頭、ツァボのアフリカゾウ個体数は約2万頭と推定されていた。しかし当時、数年にいたる旱魃や、野火、アフリカゾウの行動による植生変化等をはじめとする複数の要因で、ツァボの生態系には大きな変化があった。アフリカゾウ個体群が植生に及ぼす影響は増加し続け、ツァボ国立公園はいわゆる「ゾウ問題」により、砂漠化するのではと懸念されていた。

それを食い止める目的で、別の科学者集団からゾウの間引きが強く求められた。この提案は、問題解決ではなく管理手段の一つとして、イギリス人博士 Richard Laws 氏がウガンダで国立公園

内での間引きを進めた直後に出てきたものである。実施には、ツァボはアフリカゾウにより砂漠化したことはないし、今後もその動向はない。ツァボ地域を取り巻く気象サイクルに関して、科学者らの観測もデータも見たことがなかった。しかし公園協会に対し、科学者2名が300頭の間引きを提言した。個体群調査のサンプルとして、と言うのだ。評議員全員がこの提言を受け入れたわけではなかったが、結局、間引きを1965年に実施することで承認した。

間引きから得た調査結果について、科学者らが評議会に報告したのは、間引き実施から3カ月を経てのことだった。そのレポートによれば、ツァボで間引きした300頭のサンプルから、10集団の個体群が確認され、その各個体群の詳細を調べるため、さらに、その各個体群ごとに300頭の間引きを要望する、というものだった。つまり、詳細データ収集の名目で、さら3000頭の間引きを要求したのだ。

公園協会局長は、二人の科学者らが、検討と承認を求めてその要望を評議会に提出するずっと以前から、その要望について疑義を抱いていた。局長は、「異なる個体群」を示す特徴を明らかにしようと試みた。研究チームに個体群区別の根拠や、個体群区別を容易にする特徴等に関する科学的レポートの提出を求めた。こうした局長の行動は、物議を誘発する。科学的レポートの準備が進むにつれ、二人の科学者は、局長解雇のキャンペーンを開始したのである。今の若い局長(28歳)には、科学的研究を妨害する資格はない、と言うのが彼らの主張であった。彼らに幸いしたのは、その若い局長こそが野生生物学者として教育を受けた人物であることを知らないことだ。

公園協会は、二人の科学者と彼らのパイロット Mr. Ian Parker (以前はケニアゲーム局のウォーデン、以後、ゲームハンターやパイロットに転身) が策謀した陰謀に関する情報を秘密裏に得ていた。そのパイロットは、300頭間引きという最初の「研究サンプル」による収益で航空機を入手していた。ゾウの死体から、象牙や皮、足首、尾などを売っていたのである。ハンターであるパイロットは、ある会社の一員で、その会社には「隠れパートナー」・アドバイザーとして二人の科学者の存在があった。物的証拠も上がり、情勢はますます厳しさを増した。

研究部門の局長が、観光野生生物省へ駆けつけ、若き局長を解雇するようケニア政府を説得しようとした。しかし担当省も評議会も受け入れなかった。二人の科学者は、さらに高次高官を通じて局長解雇を試みたが、イギリス高等調査委員会もこれを支持せず、ケニア政府の決定を受諾するよう進言した。

二人の科学者は、ツァボ国立公園に近いケニア国境付近での間引きをタンザニア政府に持ちかけようとしていた。しかしケニア国立公園とタンザニア国立公園との連携で、見せかけの「調査」による間引きを阻止することができた。

(2)汚職と密猟

アフリカゾウ生息地として貴重な地域であるツァボ国立公園であったが、象牙を求める密猟者が常にアフリカゾウ個体群を脅かしていた。とくに1976年の組織合併以降の誤った管理体制が顕著となった。

ゲーム局と国立公園協会が1976年に合併した当時、国立公園側の倉庫には、象牙103トン、サイ角7.5トンが保管されていた。しかし、前任のゲーム局ウォーデンが野生生物保管理局(WCMD)局長職を継いだ1977-79年の間に、すべてなくなってしまったのである。保管され

ていた象牙やサイ角は、公園協会当時に密猟者から押収したものを含め、61—67年の早魃期を主とする自然死個体から合法的に収集されたものであった。

野生生物保全部・新局長と政治家との間に強力な関わりがあることは誰の目にも明らかだった。先の大統領ケニヤッタのママ・ンギナ・ケニヤッタ夫人は、象牙やサイ角、毛皮等 狩猟品で親族ともども私腹を肥やしていると噂されていた。ケニヤッタ夫人は、何かにつけて局長と動いていた。

その時期、国立公園協会の崩壊は、ウォーデンやレンジャーらのモラル低下ももたらしていた。数知れない人数のスタッフらが、経済的利益を求めてゾウやサイ、その他大型動物の「密猟者」となったのである。彼らは、かつての国立公園内の安全性を知っていたと同時に、新しい部局が管理する絶望的で一貫性のないセキュリティ体制を知っていたのである。職員の墜落は、ケニアやアフリカ諸国のゾウやサイの保護活動に暗い影を落としていたに違いない。

(JWCS 会報 No.57 2009年5月より転載)